# 「芸術学の変容―周辺領域からの提言―」報告

青木孝夫

第二十回の記念大会で「芸術学の変容―周辺領域からの提言―」と題したシンポジウムが二〇〇六年七月に実施されました。このシンポジウムを企画・実施した立案者として報告を行います。最初に企画の趣旨としてあらかじめ周知しましたものを再録します。

現在進行形で芸術は変容しています。複製技術やメディアとの融合による音楽の実態を考えてみれば十分です。また芸術として表象されるものにも力点の変化があります。西欧の高級芸術のみが芸術ではないこと、翻って非西欧文化圏の芸術や日常生活の中の美的契機が考察の対象になってきています。

これら考察対象の拡大や境界また重心の移動が芸術に関する理論や言説の変化をもたらしていることはたしかです。しかし理論的な変化（またその背後にある思潮の変化）が従来の典型現象や普遍的本質とみなされた芸術の側面とは異なる側面を強調し浮き彫りにしていることは重要です。独創的個人の創造した絵画のごとき芸術作品は現在も尊重されていますが、一方でパフォーマンスや素人の実演が注目されていることも知的関心の変化を示しています。その背後には研究者を巻き込んだ時代の思潮の変化があります。たとえば世界遺産への人々の関心は、文化に対する社会的関心が、従来の芸術観や芸術制度に対するのとは異なる形で高まっていることを物語っています。インターネットによる情報発信は、礼拝的価値や展示的価値とは別の価値のありようをたとえば写真イメージに関しても示唆していますし、なによりすでに人々は別のありようをした価値を実感しています。

芸術以上に芸術を分析し語る言説や知のありようが変容しているというべきかもしれません。

芸術の学としての美学の側から見ると、今日美学の中心はあくまで芸術に関する研究のように思えます。十八世紀の半ばに美学が成

立した時期には同じく芸術が類概念として成立しています。しかし、他方で自然を相関者として崇高や美やピクチャレスクが語られてもいました。（その意味で、今回のシンポジウムの守備範囲を超えますが、芸術の哲学としての美学が如何にして成立してきたのかが問われねばなりません。）現在、逆に芸術の学としての美学が自然美を取り入れた学へと展開・転回しつつあるように思われます。社会の中で自律・自立しているとみなされていた芸術文化に関する考えも見直されて社会学的な研究傾向が強まっています。芸術も関与せざるを得ない資本主義経済の市場性を巡り、文化マネージメントの需要が高まり、また文化産業に対する考察がいっそう必要になっています。これらはいずれも近代美学というパラダイムの理論的射程を超えている事態です。近代美学という教説だけでなく、それを支えた社会や世界観が変容しているのです。いわゆる歴史記述や他者の問題は、その変化を端的に示しています。重要なのは研究者自身がこの潮流に関与して芸術の学としての美学の大枠が変更されていることです。

今回のシンポジウムでは、上記の大きな認識を直接に扱うというよりは、近代美学というパラダイムからすると、その中心ではなく周縁で、この芸術学あるいは美学の変容に、舞踊やスポーツやメディアの研究者として実践的に関与してきた方々をお招きして、各々の携わる研究領域での考察対象や領域区分の変容、それらを問題にする研究者の関心の変化、また研究を組織化し表現する知や言説の変化について、報告をお願いしています。（日本という異文化芸術の研究者として私も参与します。）すでに変化は明らかです。この知の潮流の変化を推進し、定着の努力を積んできた研究現場の報告と見通しをうかがうことが、今回のシンポジウムの企画の主眼です。

以上の趣旨で開催したシンポジウムに関する記録また批評が、広島芸術学会の会報八十九号（二〇〇六年九月）に川口佳子氏（現在、京都工芸繊維大学・大学院）によって掲載されていますので、再録します。

パネリスト：秋庭史典（名古屋大学）、外山紀久子（埼玉大学）、樋口　聡（広島大学）

司　　会：青木孝夫（広島大学）

本シンポジウムでは、藝道思想、情報科学、スポーツ、ダンス等の各領域に関わる研究者からの報告をもとに、「芸術学」という学問の主題・性質の変容について議論がなされた。

４人のパネリストからの報告が行われた。まず名古屋大学の秋庭史典氏が、「周辺からの提言―情報科学と芸術の境界から」とする報告で、同大学で情報科学を専攻する学生らによる試みを紹介し

た。高度の情報化社会において、彼ら学生もまた、正確さや再現性、一元性、自動性、効率性などの情報処理的原理に基づく、記録や認識の方法の変化から逃れられない。同研究科で行われたインターメディア・パフォーマンス〝Cycling〟は、他人の手による日記や映像などを、自らの身体を媒体としてパフォーマンスで語ることで、上記とは別の記録・認識のあり方を模索する、新たな芸術・教育活動の例として提示された。

次に、広島大学の樋口聡氏が、「芸術学の変容―アート・東洋・教育・メディアの位相―」と題する報告を行った。まず、スポーツの美学的研究の系譜に基づいて、「芸術」の概念の再検証がなされた。「スポーツは芸術か」という問いは、狭義の「芸術（fine arts）」概念の枠を超え、「アート」の原型により回帰した考察の可能性を開いてきた。こうした「学の変化」を踏まえ、樋口氏は「芸術」をより相対化した概念として「藝術」を導き出す。そして、教養や観照が中心の「芸術」―西洋近代美学の位相とは異なる、修養や実践者の美的体験を中心とする「藝術」―東洋的美学の位相において、新たな教育的地平が見いだされた。また、芸術論における「メディア」という主題に関しても、マス・メディアによるジャンル（スポーツ、アート）の融合など、独自の理論が展開された。

第三に、埼玉大学の外山紀久子氏の報告、「『ヴェクサシオン』のあとで」が行われた。外山氏においても、芸術の実践的側面に光が当てられた。すなわち、芸術家／観客の厳格な差異化によらず実践される「草アート」や、日常の再生産的労働の延長上にあるような「サム・アート」への注目である。そこでは、素人あるいは家事労働を担う生活者としての観客の身体の価値が救い上げられる。観客は目のみによって鑑賞することを離れ、身体的主体、参加者、協働制作者としての豊穣な経験を得る。外山氏は、これら「周辺領域」の芸術活動に、従来の美学や芸術研究の言説から閉め出されてきた身体の価値を提起する「チューニング（調身＝調心）効果」とも言える意義を見いだした。

最後に、広島大学の青木孝夫氏（兼司会）が、報告「日本的藝術観―藝道思想―の生成を巡って」を行った。まず近代以後の西欧における藝術学の変容が追われ、これを受けた現代は、もはや藝術に普遍的な本質が認められず、様々な藝術概念や藝術観が多様性のままに並列（氾濫）している状況であるとされる。こうした中で、日本における藝道概念（継承、模倣、実演）もまた、西洋の藝術概念（創造、独創、作品）のオルタナティブとしてではなく、複数の藝術観の中の一形態として浮かび上がるだろう。日本の藝道における創作的実演的ハビトスは、西洋の前近代的な創造観に通底するものでさえあったはずであり、そこに歴史的社会的な経緯の中で日本独自と言える味付けがなされ現代にも生き延びている。藝術的営みを個人の人生の意義と結びつけて行く考えが認知されている現代、藝術作

品に関する「教養主義」とは別に、作品制作や藝術的実践を通した自己形成（セルフ・エデュケーション）に価値が見いだされていること、またその意義についても言及された。

以上のように、芸術学または芸術論をめぐる様々な「変容」の相がそれぞれ取り上げられた。各パネリストは、芸術学の範疇でいまだ中心的に論じられ難い「周辺」とされる芸術領域を含む提言を行ったわけであるが、会場からは、「周辺」という言葉の定義への問いや、芸術活動と芸術学の「周辺」とはかならずしも一致せず、あるいは後者に遅れがあるとも考えられるのでは、という意見などが上がった。このような意味でも、芸術の学の主題や性質は、本シンポジウムでの研究者からの提言を通して、まさに「変容」のうちに紡がれつつあるのだと感じられた。また各パネリストにおいて、「身体」という言葉が、非限定的でありながら緩やかに連動する意味で用いられていたことも印象的であった。それは心身の二元論や何らかの身体論へと抽象化・図式化されるものではなく、生ある者がみな生活の中で共有しているものであり、コミュニケーションやスポーツの修錬、芸術の実践を通して何らかの変容を被るものでもあった。「周辺」からの提言は、本シンポジウムで紹介されたような、人間のあいだで行われる様々な具体的営みにより肉迫しながら、今後も芸術の学を切り開いて行くのではないだろうか、と思われた。

（報告：広島大学大学院・川口佳子）

当シンポジウムの企画者であり、また壇上にパネリストとしてあったものとして、川口氏の報告とは別に、簡単に当時を振り返り感想を述べます。記憶に曖昧な部分もありますので、正確よりは企画の性格を繰り返すことにいたします。

当初、シンポジウムのタイトルのもとに考えていた三つの主題は、第一に藝術の変容、次にこの藝術を研究する学問、即ち美学（ないし藝術学）の変容、そして研究を遂行する際の研究姿勢の変容でした。加えて、これらの一連の変化の背後に看取される文明と生活の変容が問題でした。主眼は、第一の点を踏まえた第二の点にありました。

折りしも、日本大学の佐々木健一教授の主導で藝術学関連学会連合創立記念のシンポジウム「藝術の変貌／藝術学の展開」が、二〇〇六年六月に実施されました。結果的に、企画の段階で我々のシンポジウムと基本コンセプトが似たのは同じ〈藝術学〉繋がりのせいでしょうし、時代の状況があると思います。

本シンポジウムの一つの特徴は周縁ないし境界という視角でした。パネリストの樋口、外山、秋庭の三氏は、それぞれ美学や芸術学の領域でも重要な活動をしてきました。スポーツ、舞踊、情報技術などの研究領域は従来の藝術学の基準からすると、周辺ないし境界に位置すると言えましょう。しかし周縁あるいは芸術と非芸術と

の境界という立ち位置だからこそ、芸術の変化ないし芸術学の変化、そしてそれらの変化の根底にあるものを考える上で、有利な面があります。これらの領域はむしろ今日では、藝術現象の変容を推進する中核的な問題と深く触れ合っていると言うべきですから。

各パネリストの提言の中で日常性や身体や実践というキーワードで問われる現代の藝術状況、またそれを探求する知の枠組みの変容が浮上しました。キーワードの示唆する論点は、それぞれの領域で西欧近代美学というパラダイムの批判に繋がるでしょう。しかしながら近代藝術観の周縁あるいは境界で仕事をしてきたパネリストの諸氏にも、顧みれば、意識的にせよ無意識的にせよ、西欧の近代美学という中心に合わせて自らの言説を調整する過去があっただろうと思います。靴に合わせて自分の脚という研究の立脚点を切り捨てる傾向があったかもしれません。しかし周縁に位置することによる、その痛みによって却って美学のパラダイムの有効性の射程や歪みがよく見え、既存の学問へ批判的な視線を向けやすい面があったでしょう。最近の三氏の仕事にも、また当日の提言にも、この点は観取されました。

関連し、一言だけ研究者の姿勢の変容について述べます。今日、周辺や境界とは関わりなく、多くの研究者は自らの研究位置や知的姿勢に関して自覚を深めてきています。批判的反省そのものが研究の契機として必須のものとなってきた現状では、すでに近代美学のパラダイムに疑念を呈する段階を超えて、自分たちの立脚点からものを考えて研究を推進するという姿勢に転換し、それぞれの領域で知的な成果を結実させてきています。ここには日本の国内的な状況に限っても、学問的な課題の自覚に関して、一世代上の西欧学としての美学の研究者とは異なる学的状況が出現していると思われます。

藝術学という学問の変化の背後にあるのは単なる藝術の変化という現象だけではありません。藝術の変化は社会の変化、個人の変化、知の変化等々と切断しがたい問題です。少し大げさに言えば、文明の変化をいかに知的に自覚するかが学問的営為の根底にあります。藝術の変容を扱う際、藝術の定義に関する疑念や藝術の外延的領域を問う姿勢が自ずから過去の学説の整理を越えて、探求すべき課題の次元の拡大を要求してきます。この度はシンポジウムの課題の焦点を、藝術の変容と藝術学の変容に絞りましたが、そこには問題の矮小化の一面がありました。その意味で、もっと現代の文明的状況や日本の近代化の問題に立ち入るべきだったかとも思います。しかし、これらの論点は相当程度まで当日の配布資料やパネリスト同士また会場との質疑応答の過程で浮かび上がってきていました。

今回、登壇されたパネリスト諸氏は、すでに上記の知的実践に踏み出しています。こうした個人の活動を通して、知的風景は確実に変容し、その波動は既存の美学研究の基盤を洗い出し、従来の「高

尚な」藝術を研究領域の核とした美学への懐疑・批判となり、美学もまた新しい知の方向性に向かって動き出しています。このことが些かなりともシンポジウムを通して理解また実感されたのであれば、立案者としては喜ばしく思います。

末尾ながら、ご協力くださった関係各位、またご来場の皆様に心より感謝申し上げます。

（あおき・たかお　広島大学・大学院総合科学研究科）